

「貧乏見たけりゃ猿払へいきな」 と言われた村が、ホタテの稚貝放流で、 豊かなオホーツク地域づくりのリーダーになった

糸乗 貞喜

(よかネットNO.24 1996.11)

- 1 地域経営・第三セクター

戸当たり、年間150万円の漁獲水揚げから13%の強制積み立て

11年前、何気なしに手にした雑誌に、猿払村のホタテ貝再生の話が載っていた。年間水揚げ150万円と言っても、漁船・漁具などの修理や油代を見たら、おそらく実質所得は半分を多く超すことはなかろうと思った。その雑誌には、「天引き貯金を確実に実行するために、組合員には生活費7万円の月給制として強制積み立て」をしたと説明されていた。これが行われたのは、万博景気の昭和45年のことである。

そして10年後（昭和58年度）、稚内税務署管内の高額納税者（1000万円以上）99人の内59人が、人口3000人余の猿払村の人によって占められることになった。正に大冒険・大成功物語なのだが、海の中に稚貝を蒔くと言うような大リスクが、何故受け入れられたのか、放流した稚貝が同じ場所で成長するという「あて」があったのか等、納得のいかないことが多かった。

「猿払村はかつて日本一のホタテガイの資源に恵まれていたが、乱獲がたたって資源が枯渇し、密漁でもしなきゃ食べていけない日本一の貧乏村に転落してしまった。そこで試行錯誤の上実施した稚貝放

流が成功し、日本一のホタテガイの生産地に蘇り」近隣漁業組合の見本となり、豊かなオホーツクのホタテガイ漁業が復活した、という物語を確かめるのが、この10年の宿題であった。その望みを、この夏果たすことができた。

連絡を取ってみると、私の読んだ文章を書かれた前田保仁元助役が健在であり、会って下さることになった。会って、たんと話されることを聞きながら、貧乏も豊かさも私の想像以上だったことがわかった。ちなみに、前田さんは、甲子の生まれである。最近の甲子（きのえね）は昭和59年（1984）であるが、もちろんそれより60年前の大正13年である。丙子の私とはひとまわりちがうことになる。

漁業組合で聞いた話や元助役の前田さんの話を、この小文で全部紹介するわけにはいかない。詳しい話は、前田さんがいろいろ書かれたものや、話されたことの記録をもらってきており、それひとつひとつが大切なものである。別に次の世代のためにといて、B6版100頁の記録もある。やむをえぬので、私の印象に深く感じたことを中心に書くことにする。

「村に金がない、職員に給料が払えない」とは？

「私のはじめて出勤した日にですね。役場に近づいてきますとね、何やら何人が書類を縄で縛って役場の中から持ってきて、車に積んでいるんですよ、今ならさしづめ段ボール箱ということになるんでしょうが」と、ニコニコしながら話が始まった。

前田さんが着任した昭和28年10月の朝、警察が捜査に入っていたのである。容疑は公金の横領とか着服というようなことなのだが、実態は役場に全くお金がないということと、役場の会計が開拓団の会計を受け持っていたことから起こったことである。

考えてもみていただきたい。昭和28年当時の村役場の会計担当者が、開拓団の複式簿記と役所の官庁会計の区別がわかるのはかなり無理なことである。そこへもってきて、財政逼迫し、職員の給与を払うため、とにかく目前にある開拓団の金を流用したり



図表1 猿払村(さるふつむら)
人口3,155人(H2)、面積585.74km²、村の中を猿払川が流れているが、この川は「その源を天北山脈標高100mに発し、北流して、石炭別川、ボロナイ川、濁川、狩別川などの大小の支流を合流してオホーツク海に注ぐ流域面積374.0km²、流路延長59.5kmの2級河川」と説明されている。

しているうちに、帳簿が混乱してしまったとしても笑うことはできない。

それまで北海道炭鉱汽船に勤めていて、炭鉱の原価管理をやっていた前田さんは、友人の紹介と強制のようなことによって役場の財政建て直しのため、見込まれて移ってきたのだが、帳簿がないのでは整理のしようがない。村長や助役に相談しても方法がないし、結局警察に行き、帳簿を見せてもらうことになった。ところが既に検察庁が持って行ってしまっていた。検察にお願いにいくと、事情はわかるが、持って帰ることはできないし、ここでは場所もないし見てもらうわけにはいかん。結局、警察に検察から借り出してもらって、警察署で見せてもらうことになった。毎朝5～6時頃の汽車で稚内へ行き、手書きで写し取って来るという作業から始めた（コピーはなかったのだ）。

毎日警察署に通っていると、朝8時半頃に掃除をしている民間人がいる。その人が逮捕された猿払村の出納担当者であった。そこではじめて自己紹介をし合って、説明を聞いたりしてだんだん事情がわかるようになった。

いくらなんでも信じかねる？

こういう状況だから、遅配欠配が当たり前になっていて、着任以来、全く給料がもらえないという状態だった。また役場が手当たり次第に金を借りていて返さないの、役場の職員の信用もなく、米などのツケ買いにも応じてくれなかった。

役場の職員は税金集めにいくのだが、村民も収入がないのだから払ってくれない。札幌に出張するとき、給料をもらっていないので、立て替えることもできず、やむなく旅費をくれと助役に言うと、助役が税務課の人間を集めて、ポケットから少しずつ金を出させて、それをもって出張するというようなことだった。

この背景としては、当時地方財政はどこでも大変だった。戦後の悪性インフレを退治するため、均衡

予算を組んでいたし、起債（借金）などもできなかった。それでいて実質的再軍備である警察予備隊をつくり、6・3制という新しい教育制度のための費用が増大していた。

その中で猿払村は、村内最大の産業である石炭業が後退し、40年代からはどんどん廃山に追い込まれていった。漁業もホタテ貝は27年頃から漁獲量が減っていたし、29年になると北海道のすべての海からニシンが消えてしまった。全国の自治体が財政的に困っているとき、産業がなく税収のない猿払村の窮状は当然といえたのかもしれない。

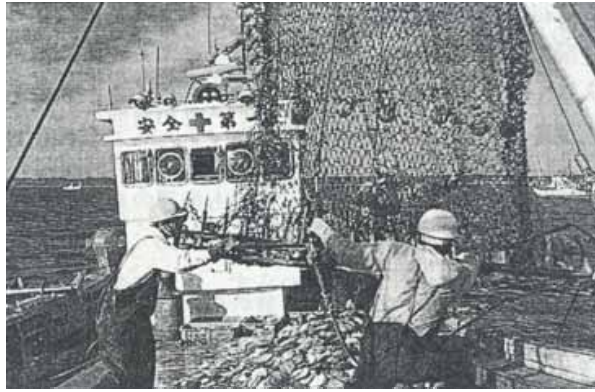
貧乏を見に来られちゃった話

「実は…」と見せてもらった本には、本当に「貧乏見たけりゃ猿払へ行きな…」という文字が出ていた。以下に『だきしめ北海道』という本の一部を引用してみる。

「宗谷郡猿払村というオホーツクの村、日本最北端の宗谷岬から国道238号線を海沿いに30キロほど行った、なにもない村だ。ボクが10年近くまえ初めて北海道を旅したときには、『貧乏見たけりゃ、猿払へ行きな……』という台詞をしばしば耳にした。そんなにすすめるのなら、と行って見て、たまげてしまった。朽ち果てそうな木造平屋建ての家ばかり。どの家も、北の窓や外壁には、ビニールハウスの透明ビニールをびっしりと貼って、来る冬にそなえていた。

事実、当時の猿払村は、林業はだめ、漁業もだめ、石炭もだめ、観光はもとからだめ、という苦況に立っていたようだ。村民はツメに火を灯すようなつましやかな生活をし、村の機能もマヒ状態に近かったらしい。村自体が消滅しそうだったともいう。

それが、ホタテの養殖で、大当たり！驚くなかれ、漁師さん一人当たりの平均年収が、いまでは4000万円。去年、村を訪ねてみたら、ひと昔まえの大貧乏はどこへやら…。白い壁の鉄筋コンクリート三階建ての豪邸が、あっちにも、こっちにも。出かせぎ



巨大熊手に網のついたものでホタテガイをとる



猿払村の中心街

単位：千円

村名	数 量			人口一人当財政		
	昭28 A	昭56 B	B/A	昭28 A	昭56 B	B/A
入道町	財政規模 37,000 世帯数 1,150 人口 6,900人	1,711,000 4,200	46倍 0.6	5	407	76倍
猿払村	財政規模 37,000 世帯数 1,650 人口 8,300人	3,757,000 3,500	101 0.4	4	1,071	240

図表2 村財政の比較推移

単位：千円

漁協名	数 量			組合員1人当		
	昭28 A	昭57 B	B/A	昭28 A	昭57 B	B/A
組合員	305人	120	0.4倍			
自己資本	2,709	1,482,896	547	9	12,357	1,373
固定資産	5,063	1,312,184	259	17	10,935	643
貯 金	10,816	6,173,769	570	36	50,448	1,429
貸付金	23,545	2,389,533	101	77	19,913	2,586
販売高	101,171	7,066,634	342	332	58,683	1,964
購買高	20,640	782,652	774	68	6,522	866

図表3 漁業組織事業推移比較

に行く若者は皆無、嫁不足なんかどこ吹く風、北海道の町や村ではまず見かけることのない高級車がひしめいていた。」(村野雅義著、昭和61年刊)

ここで書かれているように、猿払の貧乏話は北海道では有名であったらしい。またホタテ養殖の大成功も、より一層有名である。

もうひとつ「随想貧乏見学とその後」(かいびやく、昭和59年1月号)という農業関係者の文章が載った雑

誌を見せていただいた。その話を要約してみる。

昭和28年に猿払村見学に行った。

そのきっかけは、北海道で一番の稲作地帯であるA地区の農協理事から「どこか先進地でおもしろい処に連れて行く企画」をしてくれと、少し奢った態度で依頼されたことだった。

それに対してこの著者は「圃場整備・技術水準・経済安定度からみて、これ以上のところはないよ。珍しいものさがしは別だが」と答えた。「そこそこ珍しければよい」といわれたので「内地に行かなくても身近に視察場所はあるよ」と言った。

「世の中の貧乏を見学しようではないか」と提案してみた。

そうして、当時新聞紙上に伝えられていた中から一番貧乏と目された日本最北端の猿払村の農業、農協、役場はどうだろう。必ず学ぶものがあるはずと、若干の説明を加えて提案した。

この見学は実施に移され、村役場、農協(職員が3人だけで、A地区某農協の支所にも及ばない規模)、酪農家をたずねた。この酪農家は老婆と夫婦、子供3人の家族で、子供が「いも拾い」をしていたので、「農繁期のための休校か」と質問したら、母親が「それは終わったが、うちは仕事が遅れているので休ませている」とすまそうに答えた。

このあと、もう一戸見学する予定であったが、誰かが、こんな物見遊山の格好で行くのは憚られると言いついて、もう帰ろうとの声に変わっていった。夜の宴会も盛り上がりせず、反省の声に変わっていった。

この後、猿払村は高度集約酪農地帯として脚光を浴び、ホタテ貝漁業にいたっては先に述べた通りである。一方、稲作地帯として奢っていたA地帯は、貧乏がどんなものかを知って以来、自己に目覚めて農業、農協経営の放漫をいましめて、すぐれた農協に成長している。この見学は過去を振り返り、原点

に返って農業を見つめ直す、貴重な学習になったのである。この文章の中に、昭和28年と56年を比較した表去が出ているので紹介する（図表2、3）。

「太平洋にコシマキだ」といわれながら、稚貝の大量放流へ

「ホタテガイというのは養殖じゃないんです。これは天然の漁獲なんです」といわれて、なるほどと思っただが、「海にバラバラ稚貝を撒いて、本当にそこで獲れると思っていましたか」とたずねたら、「そこなんですよ」といって、いろいろ説明を受けた。

この話は壮大な叙事詩であるので、とうていここに紹介しきれない。かいつまんでポイントだけを並べることにする。

ホタテガイは昭和17年には13,866トンという記録的な大量を示し、以後ニシンとともに猿払の経済を支えてきた。

ところが、昭和29年からニシンが全く来なくなり、ホタテガイも1,000トン代に激減した。それまで漁師たちはニシンやホタテガイは湧いて出てくるもので、獲れば獲るほど出てくるように思っていた。

ここで少し私の体験を付け加える。昭和43年頃、隠岐島西郷町の振興計画を手伝っていた。それで問題となるのは漁業、とくに高級魚であるマツバガニであり、それに対応する底曳漁船であるが、それがほとんどなかった。「なぜないのか」という私の質問に対して、「兵庫県の香住が買いに来たので売った」という話だった。戦後の沿岸でいくらかでも漁獲のあった時代のこともかもしれないが、のどかな話であった。一方の香住は小さな町にもかかわらず、地元で金融機関を設立して、将来の漁業のために底曳の権利を買っていったのである。したがって、隠岐では、始まったばかりのカニカゴ漁のみであったので、マツバガニの将来について調べるために

香住に行った。マツバガニも昭和30年代の終頃には資源問題が出ていたので、「マツバガニの将来はどうか」と底曳船主の1人に質問してみた。彼の答えに私はびっくりした。「漁師というものは連帯心があるから、魚群を見つけるとすぐ仲間に無線で知らせる。だから漁船が多ければ多いほど大漁のチャンスが増える。これだけ機器が発達しとるからどこかで見つける。減ることなど考えられん」というものであった。つまり、カニは「湧いてくる」というのである。しかしそうはいかなかった。マツバガニは漁期・漁獲制限にもかかわらず元にはかえらない。この体験があったので、前田さんの説明に納得がいった。

昭和39年以降は、ニシン同様、「幻のホタテガイ」と言われるようになった。

昭和38年、前田さんが産業課長になったとき、水産係長から「前田さん、猿払村の浜をよくするためには、根つき漁業がなければダメだ。ニシンやサンマのような漁業だったら、いついなくなるかわからないから」「まだ猿払の沖にはホタテガイがいるはずだ。これは毎年産卵したものが浮遊しているから、それを何らかのかたちでとって、人工的に増殖すれば昔のホタテガイの漁場ができる」といわれた。

昭和40年に噴火湾（室蘭の西側の湾）一帯の養殖漁業の視察に行ったら、「しっぽのついている（魚のこと）のは全然とっていない」上に、漁師の手伝いのアルバイトにサラリーマン（学校の先生や鉄道員などの）奥さん方が来ているのを見てびっくりしてしまった。また獲っているのは貝と海苔と昆布だけで、根つき漁業そのものであった。そこでも、猿払と同じように浜の人はみんないなくなってしまったが、たった一人の普及員が、自分の金で資材を買ってきたりして、こつこつと研究開発をしてきた。それに感動して、若い人が2

人になり3人になって増えていき、現在の噴火湾のホタテ養殖に結びついたということを知り「きっと男の仕事というものは、こういうことだろう」と思って帰って来た。

昭和41年以降、5万粒、33万粒、50万粒、100万粒と買って来たホタテ稚貝を放流したが、「課長、そんなわずかばかりやったら太平洋に腰巻きですよ」と言われてしまった。少しでもやればそれだけ効果があるのではないかと思ってやったのだが、彼の言うとおりで太平洋に腰巻き程度では、あるかないかわからんことになる。

それで水産試験場に行って場長に聞いてみると、最小規模は1000万粒だといわれた。大体研究者というものは、はっきり言わないものだが、場長は「1000万粒以上の大規模であれば大丈夫、資源は回復し母貝集団ができる」といった。

1000万粒というと稚貝1粒で3円プラス運搬費、ヒトデなどの外敵駆除、放流費など合計すると5~6円になる。5~6000万円いることになる。このため村が3年に限って20%の補助金を出し、さらに漁組の借入金については村が全額損失補償することにした。当然漁師である組合員も天引貯金をしたのである。

その後も本当に貝が動かずに猿払の浜から漁獲できるのか、などについて紆余曲折はあるが、昭和49年の水揚げが1,674トンになった。計画の3倍の水揚げで、それは自然発生分も含まれていたのである。

かくして10年後には4万トン近くの水揚げが得られるようになり、ホタテガイ王国が復活した。そして、昭和59年5月に発表された税務署の高額納税者番付(1000万以上の税金を納めた人)に、稚内管内99人のうち猿払付に59人いることになった。昭和58年の村の決算で地方交付税が9億4400万円になっているが、上記の59人が納めた所得税が10億1558万円であった。

所得のないところに福祉はありえない、両方進めていきたいけれども、どうしてもできない場合は生産の方を先にやらなければならない

昭和45年「過疎地域振興特別措置法」ができた。これに基づく過疎地域振興計画をつくるのだが、猿払付の振興構想は、「住民の福祉向上のためには、一つは産業振興による所得を増大すること。“所得のないところに福祉はありえない”を前提にして、他の一つは生活環境を改善することであるとし、しかもこの双方が並進することが望ましいけれども、とにかく低所得水準の克服を先決とする」と決めた。

産業振興の2本柱が「未利用の広大な土地資源を利用した酪農振興と、かつて繁栄した前漁の活用による浅海根付資源(ホタテガイ、昆布)の増養殖とし、さらに、それに加えてこれらの加工産業や特殊林産物の導入を図ることとした。

前項の に書いた1000万粒放流とその後の加工場建設に対する資金手当については、過疎債によるところが大きく、その起債が認められるまでの苦労話は、理屈も含めて極めて面白いのだが、ここには書ききれない。一言だけ付け加えると、地域の所得を決めるのは漁業のような一次産業だけでなく、「地域が外部から獲得する外貨の量を増やすこと、外貨を地域内部でぐるぐる廻る回数を多くする」ことでなければならないとしたこと。このあたり、何だか前田さんの若い頃が髣髴とする。

しかし、過疎振興の投資としては、これほど見事なことはないと思う。ハコモノづくりではなく、生産・所得をあげ続けられるシステム(放流して収穫する)を研究し、実証し、年々続けられるようになったのである。

17~18年前にある革新首長さんの誕生した町で、まちづくり計画の審議会に出ていたとき、ある高齢の委員が、先き行きのはっきりしない福祉施策の大バンぶるまいに対して「福祉福祉というけど、続かないやならん、続く福祉をやれ」と言ったことがあつ

た。私はそのとき以来、その言葉が耳から離れない。この猿払村はまさに「続く福祉」のもとである、所得をもたらすシステムを確立したのである。

今後のことなど、私の感想

猿払村の若者定着はどうなっているかについて、北海道の友人から古い国勢調査データを送ってもらって整理してみた。男女とも110~120人/5歳階層という数字で安定しつつある。20~24歳までは減少するが、25~29歳で帰ってきて定着していることがうかがえる。もう少し増えることがあるかもしれないが、昔の9000人の村人口を考えることはないと思う。当時は石炭で5000人ぐらい食べていたのであり、その基礎は失われてしまっている。

現在の村は私の想像していた以上に活気があり、明るいとこであった。宿泊をたのんでもなかなか電話に出してくれないので、宿も1軒しかないさびしい村を想像していたが、ホテル風なもの、ペンション風なものなどたくさんあった。

行った日は稚内空港でレンタカーを借りてオホーツク沿岸を走ったが、好天で気分が良かった。しかし翌日は一転してオホーツクの海から横なぐりに叩きつける風に、重心の低い車であるにもかかわらず、車が揺れ、冬の厳しさを思うことができた。宗谷の最北端へは立つことができず、車から出て売店で北を見ただけである。

もっと残念だったのは、宗谷 - 猿払村の間のオホーツク沿岸から、好天の日には樺太が見えるということを知っていたときのことである。知っていれば前日に眼をこらしてみるのだったと思っている。

それにもまして誠に残念なことは、多くの話を紹介しきれないということと、香港・中国・アメリカなどにも輸出されていて、料理の華となっているホタテの貝柱の味についてふれられないことである。ホタテは干したもののほうがうまい。そして大きいものほど味がいい。一度お試しいただきたい。

なお、ホタテガイ顛末記について御関心のある方

は、私のところにたくさんの資料があります。全部は困るので、文章でふれた「について」という注文をいただいたらお送りすることにします。また現地に行ってみたい人は御紹介の労をとります。

追記：今私たちは、比較的安い値でホタテ貝柱のさしみやにぎりずしを食べ、干物を料理に使っている。それは猿払村以降、各地で放流が盛んになったからである。

輸出にも多くまわっている。これらのもとは、噴火湾地域や猿払村などの苦労である。今そのことが、国内はもとより、海外の人たちにまで、楽しみをもたらしている。 (2004.5 いと)